

## 書評

三森ゆりか著

### 『外国語を身につけるための日本語レッスン』

(白水社、2003 年、218 ページ)

三上 純子

Mikami, Junko

外国語でコミュニケーションできるためには、文法力や語彙力が必要である。しかし、それだけでは話せるようにはならない。本書の著者は、日本人が欧米語を習得するためには、まず日本語で、欧米流の「言語技術」を学ぶのが効果的だと指摘する。「言語技術」とは、「読書技術」と共に、欧米の言語教育で必ず指導される、発表・説明・報告などのコミュニケーション・スキルのことであり、日本人が同様の基礎技術を獲得できれば、欧米人との意見交換はより容易になると考えられるからである。

では、著者はどのような学習プログラムを提案するのだろうか。第一ステップは、「察し」の言語文化をもつ日本語と論理的に説明する欧米語の差異に注目し、やや不自然ではあるが翻訳しやすい「中間日本語」を身につけることである。著者によれば、「中間日本語」は、「省略されがちな主語を意識する」、「会話で頻繁に使われる『あれ』の中身を認識する」、「5W1H を明確にする」などの点に留意すると作りやすいという。

次に、この技術を前提に、発信に不可欠な「対話の技術」と「説明の技術」を実践的に学ぶ方法が示される。ここでは紙幅の関係で、「対話の技術」の習得法について紹介しよう。

日本人の会話は羅列型になりがちだが、国際社会で通用するのは、問いと答えがかみ合う問答型の対話である。そこで著者は、日常的な話題について好き嫌いを述べる、その理由を列挙するといった問答練習をマンツーマンのゲーム形式で行うよう奨めている。このようなトレーニングを通して、結論先行型の話し方、ナンバーリングやラベリングを活用した明快な話し方を身につけることができる、と説くのである。これは、ディベートを行う前段階の部分的な技術練習とも言える。パーツ練習から入るやり方は、最初からディベートに挑戦するのが難しい人にも、取り組みやすいだろう。

小学生をも対象とした言語技術教室で指導しているだけに、多くの具体例をまじえた著者の記述は類書にくらべて平易である。留学前の学生や検定試験を受ける学生はもとより、大学入学直後の初学者にも、ぜひ一読を奨めたい。さらに、語学教員は外国語教育の基礎教育としてこのようなトレーニングを授業に取り入れることを考えても良いのではないだろうか。本書でも強調されているように、母語である日本語でできないことは外国語でもできない。急がば回れなのである。